

KEY わーど

第100回

『エコール・ド・プラトーン』からエコール・ド・オオサカ

書いても書いても、大阪のはなしは尽きません

連載100回である。開始は平成22(2010)年4月号。毎年12月・1月が合併号なので年間11冊が刊行され、先月が99回だった。

大阪と「百」という数字にこだわると、「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」が「百人一首」にあるし、連載第1回は、錦絵の「浪華百景」より、花見のにぎわいを描いた「さくらの宮景」をとりあげた。



「百人一首」の浪花とみおつくし。本文にある歌とは別の一首。
「難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ身を尽くしてやこひわたるべき」皇嘉門院別当
「錦花百人一首千代表」明治24年、大阪市南区順慶町で発行

書物では、以前に「高津の湯豆腐」を紹介した『豆腐百珍』が百種類もの豆腐料理を紹介した。天明2(1782)年に大坂で出た名著である。明治には、江戸時代の大坂について書いた「浪華百事談」(『日本随筆大成』所収)が出た。

100回は百怪に通じる。一晚に怪談を100話語ると怪異がおきる「百物語」もある。経済都市大阪は、人の生き方も現実を見すえたりリズムの街だが、江戸時代の書物にも、大坂を舞台としたが怪談話が記されているほか、現代でも、大阪芸術大学出身の木原浩勝・中山市朗両氏の『現代百物語 新耳袋』が有名である。ついに100回まで連載したので、「百物語」のようになにかでてくるかもしれない。

ところで、あるきっかけで知りあった若い漫画家が、今年1月に近代大阪を舞台にした漫画を出版した。永美太郎さんの『エコール・ド・プラトーン』第1巻(株式会社リイド社発行)である。

主人公は作家の川口松太郎(1899~1985)。関東大震災で来阪し、化粧品品の中山太陽堂(現クラブコスメテックス)が設立した出版社のプラトン社で編集を担当する。同社の雑誌『女性』には劇作家の小山内薫が、『苦楽』には直木賞の由来となった直木三十五が参加した。

このプラトン社の群像を、1920年代にパリで活躍した「エコール・ド・パリ」の画家たち—ユトリロ、モディリアアーニ、藤田嗣治、ローランサン、パスキン、シャガールらになぞらえ、「エコール・ド・プラトーン」と呼んで漫画にしたのである。

若き川口松太郎を中心に、小山内や直木たち

が、道頓堀や谷町やら大正期の大阪の街を動き回っているのがおもしろい。文楽や奉祝の花電車が描かれ、東京の菊池寛や芥川龍之介、岡本一平、かの子夫妻や岡本太郎らも登場する。巻末に依頼されて私が「大大阪」についての解説も書かせてもらっている。二巻予告には、挿絵画家として一世を風靡した岩田専太郎が登場しており、ますます楽しみです。

私も、近代大阪の画家を「エコール・ド・オオサカ」と呼んで学会発表をしたことがある。平成17(2005)年の大正イマジユリ学会の研究会のときである。「エコール・ド・パリ」は、造形的な主義主張が一致した団体ではなく、同時代のパリで活躍した個性的な画家たちの総称である。同じように大阪の画家たちも、美人画(北野恒富)や文人画(矢野橋村)、やまと絵(菅橋彦)など、絵の傾向も師匠筋も異なる画家が、この時期の大阪に集まり、ユニークな作品を描いた。

東京なら東京美術学校(現東京藝術大学)、京都なら京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)などの卒業生を核に美術団体が結成され、新しい美術運動が起きるのだが、例外はあるものの、大阪ではそうした中心となる学校が育たなかった。個人が連携してまとまっていた大阪画壇の歴史を、なかば洒落も含めて「エコール・ド・オオサカ」と呼んでみたのである。大阪中之島美術館も建設されることだし、また詳しく書くこともあるだろう。

連載100回の今号が平成の最後の回となる。来月101回は新しい元号になっている。よい時代が来ることを期待し、書いても尽きない大阪の話しに、もう少しお付き合いをお願いしたい。



永美太郎
『エコール・ド・プラトーン』
リイド社

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。